

第1章 序論

人口減少と少子高齢化が進行する現代日本において、地方都市の活力維持は喫緊の課題である。従来の観光振興や移住促進策が限界を迎える中、定住人口の増加のみに依存せず、観光以上・移住未満の多様な関わりを持つ「関係人口」の創出が重要視されている。こうした背景の中、地域資源を活用したナビゲーションスポーツ「ロゲイニング」が、地域活性化の新たなツールとして注目を集めている。本研究では、ロゲイニングが参加者の意識と行動に与える変容を、GPSによる行動データ、質問紙調査、テキストマイニングを用いて定量・定性の両面から検証する。調査対象を単一の属性に限定せず、「交流人口(来訪者)」「関係人口(関与者)」「定住人口(居住者)」という3つの異なる視座を設定した。本章では、これらの人口層がいかにして地域と関わりを持つに至るか、そのプロセスを解明するための研究目的と方法論を提示する。

第2章 ロゲイニングの社会的認知

本章では、マクロな視点から日本社会におけるロゲイニングの受容過程を分析する。過去15年間に発行された新聞記事タイトルを対象としたテキストマイニング分析を通じ、ロゲイニングという語がどのような文脈で語られてきたかを時系列で追跡した。分析の結果、導入初期には「地図」「山野」「競技」といったスポーツ性を強調する単語が頻出していたが、近年になるにつれて「観光」「親子」「防災」「地域再発見」といった語との共起が増加していることが明らかになった。この変遷は、ロゲイニングが一部の愛好家による「競技スポーツ」の枠を超え、地域振興や防災教育、健康増進といった「社会課題解決の手段」として認知され、広く社会に受容されてきたことを示唆している。

第3章 競技を目的としたロゲイニングがもたらす副次的効果

本章では、新潟県佐渡市で開催された「佐渡ロゲイニング」を事例に、島外か

らの「交流人口」への効果を検証する。本事例の参加者の多くは、競技や観光を主目的としたオリエンテーリング愛好家であったが、彼らがロゲイニングを通じて得た体験は、単なる表層的な観光消費に留まらなかった。行動分析の結果、参加者は得点獲得のために路線バスと徒歩を戦略的に組み合わせ、主要観光地だけでなく路地裏の史跡や集落へも能動的に足を運んでいた。質問紙調査分析からは、競技中に地域住民やスタッフと交流した経験が、「運営への感謝」や「人の温かさ」という情緒的な評価に結びついていることが明らかになった。これらは、競技を目的に訪れた参加者が、活動を通じて地域の深い文脈(歴史・風土・人)に触れ、地域への好意や再来訪意向を抱くに至る「副次的効果」の表れである。特に、制限時間内に回りきれなかった未完の体験が、イベントへの再参加意向を超えた「地域そのものへの再来訪意向」を高めている点は、交流人口をリピーターへと深化させる重要な知見である。

第4章 地域振興を目的としたロゲイニングがもたらす効果

本章では、本研究の中核となる「つくばR8ロゲイニング」の複数の実践(大曽根、上郷、谷田部)を事例に、地域に関わりを持つ「関係人口」への効果を検証する。これらの地域は著名な観光地ではない生活圏であるが、ロゲイニングの実践により、参加者の地域認識に変容がみられた。上郷地区の事例では、大学の授業という受動的な動機で参加した学生たちが、無機質な大学周辺とは対照的な農村景観や歴史的風土に「安らぎ」を見出し、地域の価値を再評価するに至った。また、谷田部地区の事例では、参加者が「カフェ」や「商店」を具体的に訪問し、イベント後も継続して店舗を利用したいという意向を示した。

これらの結果は、ロゲイニングが日常的な風景をエンターテインメント化し、参加者を「観客」から「当事者」へと変容させる機能を持つことを示している。地域資源の再発見と経済活動への参加意

識の醸成は、一過性の交流人口を、地域に継続的に関与する関係人口へと育成する土壌となることが考えられた。

第5章 新しい地域のロゲイニングがもたらす効果

本章では、開発が進むTX沿線開発地区や、防災・環境学習をテーマとした新たな実践を事例に、「定住人口」への効果を検証する。新住民にとって、居住地は単なる「住む場所」であり、地域の歴史やリスクへの関心は希薄になりがちである。しかし、ロゲイニングを通じて自身が住む土地の起伏や旧跡、避難場所、グリーンインフラなどを探索することで、住民は地域の成り立ちを空間的に理解することが可能となる。これは、ロゲイニングが新住民に対し、地域への帰属意識を醸成し、防災意識を自分ごととして捉え直させる有効な教育ツールとして機能することを実証している。

第6章 結論

本研究では、ロゲイニングが地域にもたらす効果を、交流・関係・定住という3つの人口層の視点から多層的に検証した。結論として、ロゲイニングは単なるスポーツイベントではなく、参加者の属性や地域の特性に応じて柔軟にその機能を変えることが明らかになった。交流人口に対しては「能動的な探索による地域理解の深化」を、関係人口に対しては「日常景の再評価と経済的関与の促進」を、そして定住人口に対しては「シビックプライドと防災意識の醸成」をもたらす。今後の地域振興においては、画一的なパッケージの適用ではなく、その場所や運営者が持つ固有のポテンシャルや課題、そして参加者の意識を深く加味した上で、ターゲットとする人口層に合わせ、ロゲイニングの設計(移動手段、テーマ設定、チェックポイント選定、クイズなど)を戦略的に設計することが求められる。このようにデザインされるロゲイニングの実施こそが、持続可能な地域社会の構築に向けた新たな指針となるものである。



図1 大曽根ロゲイニングマップ2025



図2 谷田部ロゲイニングマップ2025



図4 上郷ロゲイニング(筆者撮影)



図5 谷田部ロゲイニング(筆者撮影)



図6 香取台ロゲイニング(筆者撮影)



図7 研究学園ロゲイニング(筆者撮影)

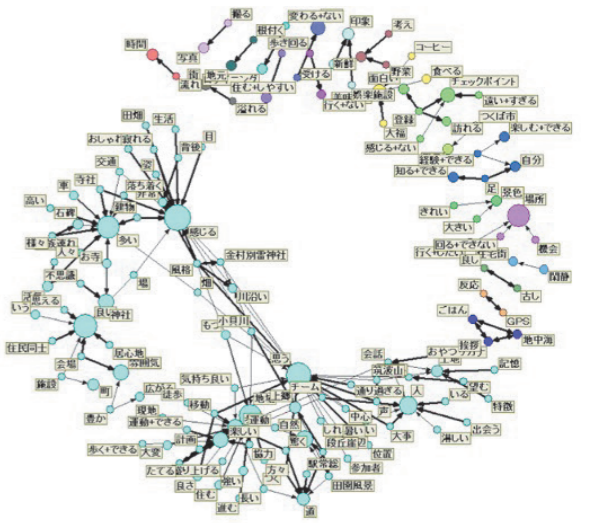


図3 質問紙調査のこたばネットワーク図(上郷、谷田部)